



目次

巻頭コラム

「名前と人の世—『小倉日記』について」 前田恭二(読売新聞文化部次長)

展示会場から

地域情報

次回展示のお知らせ

コレクション展 文の京ゆかりの文化人「鷗外を継ぐ—木下杢太郎」

特集

森鷗外記念館(津和野町)開館20周年記念 鷗外と津和野

コラム

「森於菟作『一夜』のもたらすもの」 田中 実(都留文科大学名誉教授)

これからの催しもの 2015年7月～9月

活動報告

ショップ便り

編集後記

名前と人の世——『小倉日記』について

前田恭二（読売新聞文化部次長）

おがましくも、記念館の方に『小倉日記』が好きたと口にしたことがある。その実は僅々十数年の読者でしかなく、そもそも大鷗外の書き物に好き嫌いと言うなど不遜な話だが、まあ、好きは好きに違いない。昨年夏、白水社から上梓した『絵のように』明治文学と美術』では、まさに『小倉日記』で一章を立てている。

読みどころは幾つもある。まずもって、平穩無事の日記ではない。明治三十二年六月の小倉下向は、エリート軍医としての自負を傷つけた出来事であり、当時の『鷗外漁史』とは誰ぞ」などにも露わな感情の起伏が、日々の後景をなしている。人はいかに不遇の時を過ごすのか、すなわち人間的な記録としての面白さが一つにあると言える。あるいはまた、陸軍軍人の日常といった社会的な情報も得られるだろう。筆者などは最初、豊後南画その他を聞いた過眼録として読み始めたのだった。

もっとも、いま好きのゆえんを言うとするなら、登場する人名の豊かさとなる。三年弱の日記には同世と隔世とを問わず、夥しい人名が録される。行文は簡潔で、無学な当節のマスコミ人には、無窮の余白が広がるようだが、個々の事蹟を尋ねると、その余白に、何とこのか、人の世に在る感触のようなものが沁み出す心地がある。温かいでも冷たいでもないが、その感触の確かさに、不思議と胸が落ち着く。

どういふことか、例えば、こんな風なところ——と、少し具体の話をしてみる。

明治三十四年二月二十二日の項に、矢頭良一という人物が現れる。飛行機開発を夢見ながら早世した発明青年だが、雪のこの日、鷗外に「自ら製する所の自動算盤」を示し、「曾て羽族飛行の理を窮めて一書を作り、將に人類飛行の機械を製せんとす」と語った。鷗外としても「兎に角めつらしき男」「學問は無けれど器械の事には誰にも負けぬといふ氣」（十月頃、森峰子宛て書簡）と感心したらしい。その春に上京したついでに、帝国大学理科大学の中村清二、田丸卓郎に紹介の労を取った。

この好意ある援助はむろん航空術の軍事利用を前提とした話でもあるのだろう。そこは矢頭自身が明治三十七年刊行の『早繰辞書』の奥書で力説する通りだが、筆者としては、鷗外の周旋先の一人が田丸卓郎であることに、ああ、ここに田丸が……と立ち止まる。田丸卓郎は岩手生まれの物理学者であり、後には同郷の師である田中館愛橘とともに、ローマ字普及に入れ込んだこと、そしてまた熊本第五高等学校で教えた頃には、かの寺田寅彦を物理学に導いた若き日を知る程度だが、二つほど、好ましい風姿を伝える文章を思い出す。

一つは、没後に寅彦が寄せた「田丸先生の追憶」である。明治二十九年、五高に入った寅彦は造船方面に進むはずだった。父の利正は元陸軍省の会計官で、鷗外が入省した頃はお現役で地方に勤務していたが、その意向もあって、まずは軍艦や水雷の勉強を始めたのである。ところが田丸の講義を聴き、実験を見るうちに、寅彦は物理学に

転じた。往時の恩師をしのび、欠識もなく精勤し、「書生っぽい質素で無骨な様子をしておられた」と伝えている。

もう一つはほんの寸言だが、大庭柯公『其日の話』に「今度愈辞職された田中館先生は勿論、神保博士や田丸博士は、その純学者気分が如何にも敬服である」とある。学者の今昔をめぐり、鷗外の史伝に登場する古賀精里等にも触れた放談の一節だが、柯公にはまた別の思い出もあった。小学校の頃に田丸という先生を慕ったことがあり、それが「田丸卓郎博士の叔父さんとか」だったのだという（『世を拗ねて』）。

話は次々に横滑りするようだが、ここで再び『小倉日記』に立ち戻る。先の矢頭良一は鷗外の紹介のもと、明治三十四年秋に理科大学を訪ねるが、それに先立つ八月十七日の項に、次の記事が読まれる。「矢頭鯉魚を贈る。直ちに人を馳せて大庭の家に送遣し、下物と爲さしむ」。上京に際しての、感謝の鯉と思われる。この夏の川魚を鷗外は「大庭の家」に届けさせた。大庭の名は前年の六月にも出てくる。鷗外に詩文や書に通じていることを誇り、向こう気の強そうな人物だが、師団の名簿等から按ずるに、小倉の歩兵第十四連隊副官の大庭景一を指し、これがまさに柯公の兄であるらしい。

矢頭の鯉を柯公の兄がなあ、と興じる方がどれくらいあるか、どうあれ『小倉日記』に録された矢頭、田丸、大庭といった人名の間にも、実は見えざる縁の糸が結ばれている。それらの糸で織りなされた布が、要



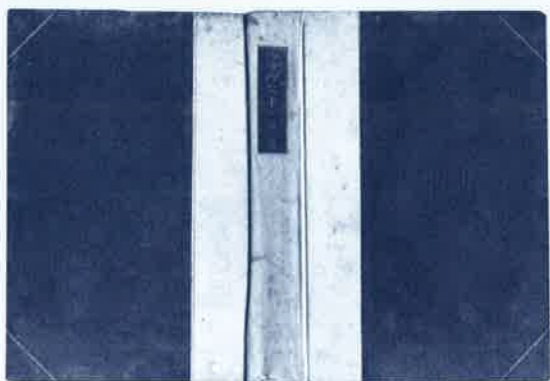
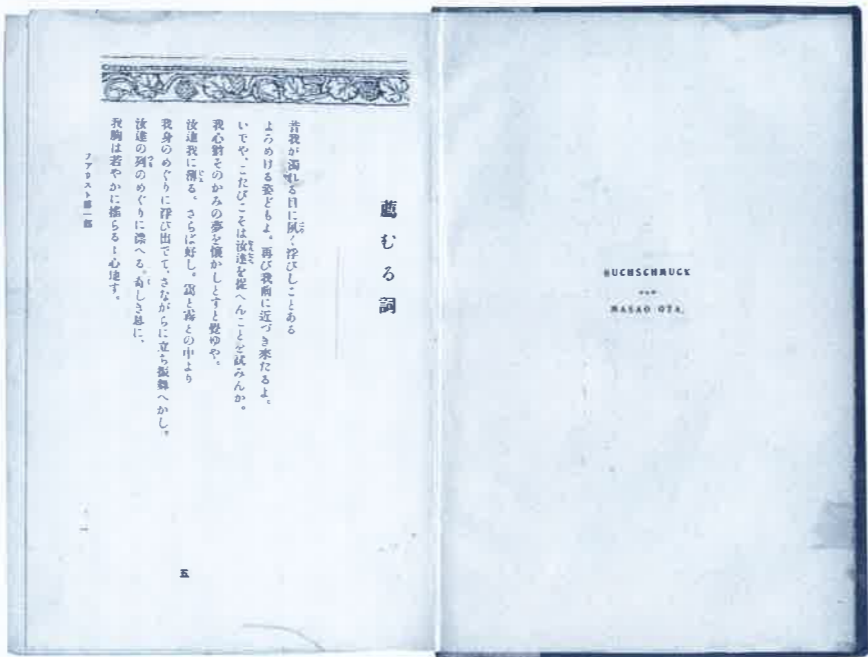
小倉赴任前日 観瀾樓茶室前にて 明治32年6月

展示会場から

鷗外訳『ファウスト』

[A7]12

森鷗外訳『ファウスト』は、日本ではじめて全篇を訳出した完訳として知られています。第一部は大正二年一月十五日、第二部が同年三月二十二日に、それぞれ単行本として富山房より刊行されました。明治44年、文部省内に設けられた文芸委員会の翻訳特別委員となった鷗外は、『ファウスト』翻訳を委嘱され、わずか半年の間に、第一部と第二部の翻訳を終えます。もちろん、この時はじめて『ファウスト』を読んだわけではありません。鷗外が『ファウスト』翻訳を志した経緯は、『独逸日記』によって知ることができます。明治18年12月、当時東京帝国大学助教授として留学していた井上哲次郎と、ライプツヒで、『ファウスト』第一部に登場するアウエルバハの酒場に連れ立って出かけました。話は『ファウスト』翻訳に及び、鷗外は「戯れ」にそれを引き受ける約束をします。また、鷗外旧蔵のレクラム版全集の『ファウスト』（東京大学附属図書館・鷗外文庫蔵）には、「明治19年1月校閲」の識語、ドイツ語と漢文の注記が散見され、鷗外がドイツ留学時代すでに、翻訳を試みていたことがわかります。



本の内容、装幀に目を転じると、いずれも実にシンプルです。「余計な事は一切書き添へなかつた」（『譯本ファウスト』に就いて）、「心の花」第17巻第5号所載と、鷗外自身が後に述べているように、内容は訳文のみとし、従来訳本に添えられる原書の解説や作者の伝記は、『ファウスト考』、『ギョオテ傳』（大正二年11月、富山房）として別に刊行されました。鷗外はこの本の装幀を、木下李太郎（1885〜1945、本名・太田正雄）に託します。鷗外の意向に沿って、古建築装飾に基づいて考案された上欄の飾り、扉の枠をはじめ、余計なものを感じさせない洗練された装幀に仕上げられました。李太郎は、装幀だけでなく訳文の校正も行い、鷗外を助けました。鷗外訳『ファウスト』は、鷗外・李太郎という関係を理解する上で手がかりとなる作品のひとつです。詳細は、コレクション展「鷗外を継ぐ——木下李太郎」をご覧ください。

地域情報

第30回 文京朝顔・ほおずき市

2015年7月18日(土)、19日(日)

今年で30回目をむかえる 文京朝顔・ほおずき市は、小石川の寺院、傳通院と源覚寺を中心として開催されます。

朝顔市が開催される傳通院(正式名称「無量山傳通院寿経寺」)には、徳川家康の母・於大の方が埋葬されています。この寺を菩提寺としたことから、その法名が由来となつて「傳通院」と呼ばれるようになりました。傳通院墓地には千姫が埋葬されるなど、徳川家と由縁の深い寺院です。

ほおずき市が開催される源覚寺は、眼病治療祈願で知られ、通称「こんにやくえんま」として親しまれています。宝暦(1751〜64年)の頃に、眼病を患つた老婆がえんまに祈願したところ、えんまが自分の右目を老婆に与えて目を治し、老婆は自分の好物のこんにやくを断つてお礼に供えたという言い伝えが残されています。こんにやくえんまは夏目漱石「こころ」や樋口大祐『こりえ』などの近代文学作品にも登場します。

期間中は、朝顔やほおずきの鉢植え販売のほか、パフォーマンスなどの催しが多数行われます。朝顔は1鉢1800円、ほおずきは1鉢2000円で、売切次第終了です。



お問い合わせ：文京区立陣川地域活動センター 03(813)130908 (平日9時〜17時まで)

コレクション展 文の京ゆかりの文化人 顕彰事業
鷗外を継ぐ——木下杢太郎

パート1 杢太郎がたどりついた鷗外
 パート2 杢太郎という生き方



満州赴任時代の杢太郎(大正時代中期)
 伊東市立木下杢太郎記念館蔵

会 期 2015年 7月17日(金)―9月27日(日)
 [パート1: 7月17日(金)〜8月24日(日)]
 [パート2: 8月26日(水)〜9月27日(日)]
 ※会期中の休館日 7月28日(火)、8月25日(火)
 会 場 文京区立森鷗外記念館 展示室2
 開館時間 10時〜18時(最終入館は17時30分)
 ※毎週金曜日は20時まで開館(最終入館は19時30分)
 観覧料 一般300円(20名以上の団体:240円)
 ※中学生以下無料、障がい者手帳ご提示の方と同伴者1名まで無料
 ※文京ふるさと歴史館入館券、パンフレット(押印入)、友の会会員登録ご提示で2割引
 ※その他各種割引がございます。詳細は記念館HPをご覧ください。

木下杢太郎(1885〜1945)、本名太田正雄)は、医学博士として大学で教鞭をとるかたわら、文学、評論、美術など幅広い分野で活躍した文京区ゆかりの文化人です。加えて本年は、生誕130年・没後70年という記念の年にもあたります。



上 『唐草表紙』 木下杢太郎[作] 大正4年2月/正確堂 森鷗外・夏目漱石[序]
 右 『南蛮寺門前』 木下杢太郎[作・面貼付画] 大正3年7月/春陽堂



杢太郎著 鷗外宛はがき 大正2年2月23日付

杢太郎は、明治18年に現・静岡県伊東市に生まれ、13歳で上京、明治39年東京帝国大学医科大学に入学しました。在学中に与謝野寛の新詩社に入社し、詩や小説を次々に発表します。鷗外との最初の出会いが明治40年、外国文学者・上田敏の留学壮行会の時でした。鷗外はその後、当時自宅で開催していた観潮楼歌会に杢太郎を招き、二人の交流がはじまりました。文学の道に進みたいと思いつきながら、家族の勧めにより医学を修めた杢太郎は、大学卒業にあたって、進路に悩みます。その時、助言を求めたのも鷗外でした。杢太郎はその後、満州赴任と、医学研究のための欧州留学で日本を離れ、フランス・リヨンで鷗外の訃報に触れることになりました。

二人が活動の場を同じくした機会は、多いとは言えません。しかし、鷗外をメエトル(巨匠)と呼んで慕っていた杢太郎は、没後の鷗外研究の中で、「鷗外は過去でなく未来への出発点である」という結論にいたります。パート1では、二人の出会いや交流の他、杢太郎が鷗外について記した文章を通じて、杢太郎がたどりついた鷗外像に迫ります。パート2では、杢太郎が創作を発表した明治40年代から、晩年までの多彩な活躍をご紹介します。

鷗外自筆原稿「平日」



関連事業のお知らせ

展示会期間中に関連講演会を予定しております。申込方法は7頁をご覧ください。

「鷗外を継ぐ者」木下杢太郎のパリ

講師 今橋映子氏(東京大学大学院教授)
 日時 8月22日(土) 14時〜15時30分
 会場 文京区立森鷗外記念館2階講座室
 定員 50名(事前申込制)
 料金 無料
 申込締切 8月7日(金) 必着

ギャラリートーク

展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。

7月29日、8月12日、8月26日、9月9日
 いずれも水曜日14時〜(30分程度)
 申込不要(展示観覧券が必要です)

7月9日は鷗外の命日(鷗外忌)です。当館では毎年7月に一カ月限定で、鷗外の遺言書のオリジナルを展示します。鷗外忌当日に展示会を親覧された方には、遺言の一節が書かれたオリジナルのしおりをプレゼントします。

特集

森鷗外記念館(津和野町)開館20周年記念 鷗外と津和野

森鷗外(本名:森林太郎)は、文久2年、父・静男と母・峰子の長男として、石見国津和野町(現・島根県津和野町)に生まれました。森家は代々津和野藩主亀井家に仕える典医でした。鷗外の生家は、国指定の文化財として現在も大切に保存されています。鷗外はこの生家のことを、自伝的要素の強い小説『キタ・セクスアリス』に次のように書いています。

お父様は藩の時徒士であつたが、それでも土塀を繞らした門構の家に丈は住んでをられた。門の前はお濠で、向うの岸は上のお蔵である。(中略)
 此辺は屋敷町で、春になつても、柳も見えねば桜も見えない。内の塀の上から真赤な椿の花が見えて、お米蔵の側の臭橋に薄緑の芽の吹いてゐるのが見えるばかりである。

西隣に空地がある。石瓦の散らばつてゐる間に、げんげや菫の花が咲いてゐる。

鷗外が生まれる前の森家では、出火や家政の不祥事などを理由に藩士格から没落し、お家断絶の危機にまで遭遇した時期もあったと言います。鷗外はお家復興の期待を一身に背負って育てられました。峰子は鷗外の勉強をみるために、祖母・清子(峰子の母)から読み書きを習い、鷗外に仮名や手習いを教えていました。

森鷗外生家
 写真提供: 森鷗外記念館(津和野町)



慶応3年、鷗外は5歳で、藩の儒学者である村田美実(よしむね)に『論語』を、山田永弼(ながすけ)に習字を、翌年には米原綱善(なほらつらよ)に『孟子』を習います。これら教師は、いずれも鷗外が7歳から通い始める藩校養老館の教授でした。鷗外は養老館入学当時のことを、同じく『キタ・セクスアリス』に次のように書いています。

七つになつた。
 お父様が東京からお帰になつた。僕は藩の学問所の址に出来た学校に通ふことになつた。
 内から学校へ往くには、門の前のお濠の西のはづれにある木戸を通るのである。木戸の番所の址がまだ元の儘になつてゐて、五十ばかりのちいさんが住んでゐる。

養老館は、8代藩主である亀井矩賢(のりかた)が天明6年に創立した藩立の学校です。鷗外はここで漢籍の基本書である『四書』(『大学』『中庸』『論語』『孟子』)を勉強し、入学早々から優秀な成績を修めました。養老館の先輩であり、親戚でもある西周(啓蒙思想家)は、鷗外の将来を嘱望して、上京して勉強することを静男に何度か勧めたと言われています。

明治4年、鹿藩置県に伴い、津和野が浜田県に統合されると、養老館も浜田県へ移管することになりました。鷗外はこれを機に、養老館を退学します。最後の藩主となった亀井茲監(きよみね)は東京へ移り、静男はそこへ招かれて一家で上京することになります。明



上 養老館前の津和野町通り 大正初め頃。右側が養老館。
 下 津和野より上京の頃 明治5年頃。左から、西周、一人おいて森静男、鷗外(10歳)。

治5年、静男はまず10歳の鷗外を連れて上京し、亀井家の下屋敷に身を寄せたのち、向島小梅村(現・墨田区向島)に移りました。翌年には他の家族も上京しますが、鷗外は一人、神田西小川町にある西周邸に下宿して洋学塾進文学社に通いました。その後、鷗外は60歳で亡くなるまで一度も津和野に戻ることはありませんでした。亡くなる間際、賀古鶴所に口述した遺言書で鷗外は「石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」という言葉を遺しました。

現在、鷗外が生まれ育った土地には、記念館が建っています。島根県の萩・石見空港から益田駅を経由し、山口線に揺られること約40分。津和野駅から川治いを進むと、次第にその姿が見えてきます。津和野町の森鷗外記念館は、平成7年4月に開館し、今年で20年目を迎えました。鷗外生家に隣接し、常時約500点の資料を展示しています。展示は二部構成になっており、第一部では上京から亡くなるまでの生涯を辿っています。第二部では、遺言から津和野へと回帰して、誕生からの日々の暮らしや郷土との関わりを詳しく紹介しています。津和野町の森鷗外記念館では、今年11月に20



森鷗外記念館(津和野町)
 島根県鹿島郡津和野町田イ238
 TEL 0856-72-3210
 開館時間 9時〜17時(最終入館16時45分)
 休 館 日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は、その翌日)、年末年始
 入 館 料 一般600円/中高生400円/小学生250円

【参考文献】
 『鷗外津和野への回想』 山崎一類監修 平成5年 津和野町郷土館
 『森鷗外記念館 明治知識人の歩んだ道』 山崎一類監修 平成8年 森鷗外記念館(津和野町)
 『森鷗外記念館報 ミュージアムデータ16』 平成24年 森鷗外記念館(津和野町)
 『さんいんキラリ春号』 No.27 平成25年 グリーンフィールズ

周年の記念講演と展示を開催予定です。ぜひ一度足をお運びください。

森於菟作『一夜』のもたらすもの

久しぶりに、『半日』を読み返し、我ながら、その感動の新鮮さに驚いています。昔と違って平成元年十月の『別冊國文學 森鷗外必携』（至文堂）の頃ですが、その時は本格的にこれに取り組んだはずでしたが、しかし、今回の読後の感銘はやはり確実に以前と違って新たなものを感じました。ところで、鷗外には二つの「幻の小説」があります。一つは『文づかひ』の後、中江兆民の雑誌『自由平等経緯』第四号に、「本誌第五号より森鷗外君の小説を掲ぐ」と予告され、露伴に「肌合はじ」と言われていた幻の離婚小説、もう一つは『続半日』と目される『一夜』ですが、『鷗外95』誌に発表された、水沼二郎氏の「資料紹介」「一夜」鷗外の問題作『半日』の後日譚（付 翻刻）によると、鷗外作のそれではなく、全く想像すらしなかった息子於菟作の『一夜』が昭和二四年八月『世界人』に発表されていきました。それだけではありません。次号には倉本幸弘氏の「報告」、記念館所蔵の佐藤春夫の於菟宛書簡の紹介があります。そこには、「もう一遍の孔子の弟子の夢の話」と共に、「一点の批の打ちどころも無いと申すべく両篇とも文品の高雅なのをさすがにと思ひました。」と評価され、「一夜」は書きづらいつとるをよよく思ひ切つてお書き下さいました。あれで我々にも一切がよく判るやうになりました。この方は云はゞ御身辺の事ではあり書く氣にさへおなりならずく出来るものだけに格別驚きませんでしたが」とあるのです。佐藤春夫の評価は小説家森於菟誕生を祝福しているとも言えるのではないのでしょうか。於菟作のこの『一

夜』は父鷗外の『半日』以上に家庭内のトラブルに踏み込み、書きにくい森家の内情を暴露し、これで森家の内情は「一切がよく判るやうになります。しかし、にも関わらず、いや、にも関わらずではありません。そののめり込みの勇氣と文学的才能こそ、その後の於菟に小説家志望を逆に断念させたのでした。

小堀桂一郎氏の『鷗外選集 第一巻』（昭和五三・一一 岩波書店）「解説」には『半日』に關し、「これはほんたうにこの通りに生じた出来事だったに違ひない」といつた実感に揺さぶられるだらう。きれいな事にすりかへる様だがそれが実は文学の力といふものである。鷗外がこの文学の力に期待した効用はたしかに功を奏した。謂う所の自然主義者が唱へる現実暴露にはなほかつまだ観念のもてあそびの様などころがある。謂はばポーズである。文学が現実生活の鏡であると主張するならば、いつそのことポーズでなく真剣勝負としてうつつしてみたらどうなのか、(中略)といふのが鷗外の思惑ではなかつたらうか。」と記しています。石川啄木もその「日記」に「恐ろしい作だ―その家庭を、その奥さんをこう書かれたその態度」と書いています。が、それでは『半日』の神髓はこの半面しか現れて来ません。語られた出来事を読むだけでは近代小説は読めないのです。

『半日』なら、近代的自我を徹底的に貫徹する「奥さん」の論理は丙午を信じる迷信家のそれであり、その存在は矛盾し破綻して

田中 実（都留文科大学名誉教授）

います。当代きつてのインテリにして視点人物の「文科大学教授文学博士高山峻威君」（傍点引用者も、実は飛び抜けた美貌の「奥さん」に對し、「あらゆる値踏を踏み代える今の時代の特有の産物か知らん」としまりがありませぬ。〈語り手〉は家庭内のいざこざの現実を暴露して見せているばかりではなく、それぞれの人物の像をすれ違わせてドラマ化し、深刻な事態を徹底的に相対化させることで、逆に、滑稽にさえ描き出しているのです。それによって日露戦後の時代閉塞の昏迷する闇を象徴的に浮かび上がらせています。他方、於菟の『一夜』の主人公にして視点人物順雄はもろろん於菟自身をモデルとし、順雄は「真剣勝負」の鏡、その凄味が家庭内の陰鬱さを描き出し、感動的ですが、『一夜』のこの主人公は父親から、「この頃は日本で流行の自然主義作家のものなども、息子の順雄に『おい、何か面白いものがあるかい。』などと云つて評判の作を推薦させ面白がつて読む。博士の話では芸術として読むのではなく、そんな生活にはかり興味を持つてゐる作家の心理が参考になるのださうである。」と聴かされてきました。順雄はそのことが頭では判つていたのですが、〈語り手〉は視点人物順雄のまなざしに拘束されてそこから抜け出せなかつたのです。また生身の於菟自身も同じような体験を既に「観潮楼始末記」（『森鷗外』昭和二二・七 養徳社）に載せていました。

平野さんであつたか他の人であつたか、於菟さんも歌をよまぬかといふ。すると父が急にねむつてゐた眼を開いて、「ナニ、こいつは自然主義崇拜でね」といつた。皆声を揃へてどつと笑ふ。私は真赤になつてキリキリ舞に螺旋梯子を迂り降りた。大学生の私がその頃流行のそんな小説をよむのを父は苦々し氣に見てゐたのであるが、人の前でひどい事をいふいつもやさしい父を怨めしく思つた。

既に森於菟は『一夜』を書く前にこのエッセイを収めた『森鷗外』を出版していました。それと知らず、父の批判する自然主義の文学を自らが書き、父に代わつて公表してしまつたのです。正しく父の代りをやつてしまつていたからこそその無謀さ、「語ること」の恐ろしさを自覚できたのです。一見同じ自然主義に見えて於菟と鷗外の小説は別のステージにあり、幻の『一夜』を書くことで於菟は自身の創作の夢を断念したのです。父親森鷗外の為人、精神世界をさらに世に伝える道はこうして選ばれました。鷗外の長男に生まれた矜持と使命だったのでしょう。ところで、現代の近代文学研究は於菟の判断のレベルに至つていないのでしょうか。〈語ること〉は虚偽を孕むのです。〈語り手〉自身がいかにこれを対象化して超えていくか、その難題との対決が〈近代小説〉の〈生命〉に外なりません。視点人物と〈語り手〉との峻別を前提に、〈語ること〉にまつわりつく擬態（ミミクリ）という虚偽との闘争、これが『舞姫』以来鷗外の切り拓いた〈近代小説〉であり、その〈読み方・読まれ方〉の隘路は今も、我々読者の前に横たわつていいると思われま

これからの催しもの 2015年7月～9月

7月4日(土) 11:00～12:30 鷗外講座 基礎編5 『高瀬舟』『山椒大夫』『最後の一句』 —歴史小説をいくつか— 講師：倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事) 料金：無料 定員：50名 申込締切：6月19日(金)	7月5日(日) 14:00～15:30 特別展「谷根千“寄り道”文学散歩」 関連講演会 若き日の森鷗外—文事と交友— 講師：出口智之氏(東海大学准教授) 料金：無料 定員：50名 申込締切：6月20日(土)	7月9日(木) 10:00～17:30 鷗外忌記念行事◎ 森鷗外の命日(7月9日)に 展示会を鑑賞された方にオリジナル しおりをプレゼントします。
7月10日(金) 19:00～20:30 鷗外忌記念講演会 『雁』の東京 講師：森まゆみ氏(作家・編集者) 料金：800円 定員：50名 申込締切：6月26日(金)	7月18日(土) 11:00～12:30 鷗外講座 基礎編6 「遺言書」 —石見人 森林太郎トシテ死セント欲ス— 講師：倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事) 料金：無料 定員：50名 申込締切：7月3日(金)	7月19日(日) 14:00～16:00 新・観潮楼歌会 短歌VS俳句 II 講師：東直子氏(歌人)×佐藤文香氏(俳人) 料金：500円 定員：50名 申込締切：7月4日(土)
7月26日(日) 15:30～17:30 文の京ワークショップ・親子向け推奨 オリジナルレターセット をつくる 講師：落合 崇氏(クラフティックデザイナー) 料金：500円(中学生以下300円) 定員：15名 申込締切：7月11日(土)	8月1日(土) 19:00～20:00 朗読会 『高瀬舟』を読む 朗読：かたりと 語りと和楽(津軽三味線・琴) の芸人衆「かたりと」による 鷗外の名作『高瀬舟』の 朗読。 料金：1000円 定員：40名 申込締切：7月17日(金)	8月22日(土) 14:00～15:30 展示関連講演会 鷗外を継ぐ者—木下空太郎のバリ 講師：今橋映子氏(東京大学大学院教授) 料金：無料 定員：50名 申込締切：8月7日(金)
8月23日(日) 14:00～15:30 文の京ワークショップ・親子プログラム 紙芝居式音読み法で鷗外を読む 講師：スズキスズ氏(紙芝居師) 料金：500円(中学生以下300円) 定員：児童と保護者10組 申込締切：8月8日(土)	8月28日(金) 18:30～20:30 文の京ワークショップ 歌会 at モリキネカフェ 講師：東直子氏(歌人) ゲスト：佐藤文香氏(俳人) 料金：500円 定員：15名 申込締切：8月13日(木)	9月11日(金) 18:30～20:30 文の京ワークショップ 句会 at モリキネカフェ 講師：佐藤文香氏(俳人) 料金：500円 定員：15名 申込締切：8月28日(金)

◆◆文京区立森鷗外記念館イベントの申込方法◆◆

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様(はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで、親子プログラムおよび親子向け推奨のプログラムに関しては親子一組につき1通)、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。

- ①**往復はがき** 往信に参加希望プログラム名・日程・氏名(ふりがな)・住所・電話番号を、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係までご応募ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。
- ②**Eメール** 件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名(ふりがな)・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@moriogai-kinenkan.jpまでご応募ください。 ※参加可否のご連絡をEメールでいたします。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

[ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外の使用はいたしません。]

活動報告

展示関連対談

「団子坂上の日々―父・類を中心に」 実施レポート

鷗外の三男・森類のご子息である森哲太郎氏をお迎えし、森鷗外記念会常任理事の倉本幸弘氏が聞き手となって、対談を行いました。

哲太郎氏が所持されている家族写真をご紹介いただきながら、類の生涯や当時の生活の様子を細やかにお話しいただきました。昭和26年、類は観潮楼跡地に「千桑書房」という書店を開店します。店頭は団子坂側の通りに面しており、哲太郎氏を含む家族の住居を兼ねていました。類は、注文や配達のため一日中自転車で駆け回り、帰宅してから随筆や小説の執筆を行っていたそうです。

鷗外の死後、母・志げの勧めで始めた絵画の勉強や、生活のために人の勧めで始めた書店とは違い、執筆は自らの意思で始めたものでした。昭和31年、類は生前唯一の著書である『鷗外の子供たち―あとに残されたものの記録』を刊行します。倉本氏は、「類の著作を読むと、森家の変遷そのものが、明治、大正、昭和と変わっていく日本という国家そのものの変遷にびたりと重なるように思う」と話されました。

哲太郎氏のユーモアあふれる語り口に会場は終始笑いに包まれ、質疑応答でもたくさんの質問が寄せられました。



日時：3月14日(土) 14:00～15:30
講師：森哲太郎氏(森類ご子息)
聞き手：倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事)

哲太郎氏には、昨年末約6千点の類旧蔵資料を文京区にご寄贈いただきました。3月11日～4月19日に開催された、文京区立森鷗外記念館新収蔵品展パート2「森類の生涯―ボンチコから作家へ」でその一部を公開しました。



シヨップ便り

当館では、展覧会に関連した絵はがきや、鷗外の象徴的なヒゲをモチーフにした商品など、たくさんオリジナルグッズを販売しています。そしてこの春、新たに「森鷗外ポータレートブローチ」がシヨップに仲間入りしました！



「森鷗外ポータレートブローチ」各380円(税込) 全5種類



陸軍軍医、小説家、翻訳家、評論家などいくつもの顔を持つ鷗外。その多様な姿は、残された肖像写真の中にもとめられています。このたび当館所蔵の肖像写真の中から5種類を選んで「森鷗外ポータレートブローチ」を作りました。種類は、若き日の鷗外、軍医としての鷗外、作家としての鷗外、観潮楼の鷗外、鷗外の横顔の5つ。形、色、サイズも全て異なります。額を模したケースには5種類全てのポータレートの解説や当館の概要が記載されています。

また、7月12日まで開催中の、特別展「谷根千」寄り道「文学散歩」図録を好評発売中です。図録では、谷中は幸田露伴の『五重塔』、『青年』にスポットをあてながら、谷根千ゆかりの文人や文学作品を紹介しています。文人たちと鷗外との交流を示す資料や、千駄木を発祥の地とする青鞥社の「新しい女」たち、文豪の娘である森茉莉や幸田文のゆかりの資料などを多数掲載。描かれた場所に残された記憶をたどりながら、あちこちに「寄り道」する盛りだくさんの内容です。倉本幸弘氏、山崎一頼氏の論考のほか、金井景子氏、出口智之氏、中島国彦氏、森まゆみ氏の「寄り道」コラムを収録。展覧会の予習や振り返りとして、ぜひご覧ください。



特別展「谷根千」寄り道「文学散歩」図録 860円(税込)

編集後記

当館では、鷗外の活動や業績を、他館と連動しながら発信しています。

当館も所属している全国文学館協議会では、平成24年から「東日本大震災と文学」をテーマにした共同展示を行っています。5頁掲載の森鷗外記念館(津和野町)を含め、今年是全国26の文学館で開催しました。当館では、平成27年2月5日から5月6日までの間、2階廊下にてパネル展示を行い、鷗外が見てきた災害について紹介しました。

また、今年7月より国立歴史民俗博物館を中心として開催される、「ドイツと日本を結ぶもの」日独修好150年の歴史」展の関連事業に参加しています。ドイツ留学をきっかけに展開した、鷗外の幅広い活動をパネル展示で紹介いたします。

今年のゴールデンウィークは好天に恵まれ、根津神社で開催されたつつじまつりには入場制限を設けるほどの人が訪れたそうです。夏を思わせるような暑さの日もありましたが、散歩日和の季節、当館にもたくさんの方々「寄り道」いただきました。

前号4〜5頁掲載の、「展示会場から」内「森鷗外年譜」におきまして誤りがありました。正しくは左記の通りです。

- 昭和19年 (誤) 3月9日 (正) 3月5日
 - 昭和21年 (誤) 12月2日 (正) 10月2日
 - 昭和24年 (誤) 文化学園 (正) 文化学院
 - 平成3年 (誤) 3月10日 (正) 3月7日
- 訂正してお詫言申し上げます。

交通案内

●電車をご利用の場合

- ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
- ・東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
- ・都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分

●バスをご利用の場合

- ・都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
 - ・都バス 上58番系統「団子坂下」下車 徒歩5分
 - ・B-ぐる千駄木・駒込ルート「18特別養護老人ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分
- ※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木 1-23-4 TEL: 03-3824-5511
URL: <http://moriogai-kinenkan.jp>



文京区立
森鷗外記念館
Mori Ogai Memorial Museum

開館時間 10:00 ~ 18:00 (最終入館は17:30)
6月~9月の毎週金曜日は20:00まで開館 (最終入館は19:30)
休館日 毎月第4火曜日(祝日の場合は開館、その他例外あり)、
年末年始(12月29日~1月3日)、及び展示替期間、燻蒸期間等